

牧者及び傳道者としての小崎先生

栗原陽太郎

一
私が小崎弘道先生の御指導の下に靈南坂教會の傳道師として働かせて頂いたのは、東京神學社を卒業する一ヶ月前即ち明治四十三年五月中旬から大正三年四月朝鮮平壤教會主任傳道師として赴任するまでの約四年間で、この間に受けた先生の印象を主とし、更に昭和七年基督教聯盟農村傳道幹事として東京に接近してより御永眠までの七年間の直接印象を副として牧者及び傳道者としての小崎先生を描くのであるから連續性を欠いた斷片的のものとなることを御許し願はねばならぬ。

二

一、牧者としての小崎先生と傳道者としての小崎先生は全く不可分で、ある牧師はこの名の如く全く一教會の牧師として終始せらるゝ人もあり、またある牧師は寧ろ傳道師としての面が大部分を占めてゐると云ふ場合もあるが、小崎先生に於ては一教會を牧する事が同時に傳道者として廣く國家社會を教化せんとする意圖の實踐であつて、靈南坂教會の牧者たる先生は、自分の牧するの教會の教會は國家社會教化の一部分であると同時に一教會の中に大きく言へば世界教化の意圖を有せられたのであつた。

二、先生の私淑せる二大先輩、小崎先生には感化を受けられた多くの先輩があるけれども、教會傳道と云ふ面では(1)チャールス・フィニーと(2)チャールス・スボルジョンの二人であると思はれる。

私が傳道師として靈南坂教會に赴任すると直ぐにこれを讀めと御貸し下さつたのはフィニーの傳記であつた。早速讀

んで見ると驚いた事には小崎先生の説教、講演の方法は全くフィニイのやつた通りに實行されてゐるのである。信仰や思想の事は後廻しとしても、先づその形式に於て説教、講演共原稿を御書きになり、近視眼のため行間を誤らぬ様に左の手の指をその行に置く處までフィニイの通りにされる。恐らくこれは一生涯御続けになつた事と思はれる。フィニイが説教、講演に於て信仰を高調し、言語は單純、表現は明白にして、論理整然、感情に訴へずして良心に訴へ、博覧強記にして材料極めて豊富であつた事實はその儘小崎先生に當て飲るので、餘程共鳴同感せられてゐた様に思はれる。

(2) チャールス・スボルジョンの牧會傳道主義方針はこれまた小崎先生の牧會傳道に對する幻に徹底的な影響を與へたやうに思はれる。小崎先生はスボルジョンの牧會傳道の計畫には全幅の賛同をせられ、これに傾倒し、それを一生涯堅持して變へなかつたやうに思はれる。

スボルジョンのメトロポリタン會堂に據れる傳道の諸事業は傳道の對象たるあらゆる人間を男女年齢職業等に區分し總てその何れかに屬せしめて信仰生に導き且つ傳道に協力させる様に組織立ててあつた。

(一) 孤兒院、(二) 幼稚園、(三) 小學校、(四) 中等學校、(五) 看護婦學校、(六) 神學校、(七) 教會銀行等の經營。

教會としては各年齢を網羅せる日曜學校、男女學生青年會、男女勤勞青年會、壯年會、婦人會、老人會等々への傳道。東京市の大教會に率先しての教會幼稚園創設。級別大日曜學校の實現。勤勞男女青年層の活躍はヨルダン會として實績を挙げ、東京市學校、靈南坂神學校の二校も創立され(この二校とも廢校になつたが)婦人會も老人會も市下の各教會に比肩するものなき有力な特色あるもので特に老人會の如き各教派に屬する各派家庭の老人達を網羅して今日に及んでゐる。以上の働きがスボルジョンの影響を雄辯に物語つてゐると思はれる。

三、大教會主義——小教會主義の海老名先生との對照——

現在の靈南坂教會堂を觀ればスボルジョンを理想とせる小崎先生の意圖を看取することが出来る。現に基督教の大山——適當の言葉でないが——とも云ふべき一大會堂建設の計畫あるは小崎先生の遺意である。更にスボルジョンにあやかつてゐるのはチャールスの息トマス・スボルジョンが第二代のメトロポリタン教會の牧師として活動せる如く道雄牧師が靈南坂の小崎第二代牧師としての現在、活躍されつゝある事實である。

四、廣義に於ける傳道者としての小崎先生

小崎先生は東京に於ける傳道の當初より同志と共に六合雜誌、東京毎週新報の創刊、出版事業としての警醒社の創立、基督教青年會の開設、日本日曜學校協會の設立、同會館の建設、基督教聯盟の組織等を成し、個人としては海外傳道として布哇及太平洋沿岸傳道者養成のため東京神學校を興し、更に南洋傳道のため靈南坂神學校を設けるなどスボルジョンの示唆を見ることが出来る。

五、大膽なる傳道計畫

教化資金に關する先生の抱負は龐大なるものであつたが、女學校敷地のため約八萬圓の土地を單獨の責任に於て購入せられた結果二十餘年に亘り非常なる苦心を重ねられたが先生永眠後遂に完全に教會の所有に歸した。

尙先生はこの世を終るまであらゆる教化資金の募集に努力せられた。

六、小崎先生の特長、一、二、

述而不作。先生は獨創的であるよりも堅實なる學究であられ正確豊富なる學識を以て公平なる評論をせられた。

更に先生は非常な廣範圍の讀書家で晝夜文字に眼を晒され讀書慾が燃え出すと屢々下宿住居をして勉強したいと申されたといふ。

最後に小崎先生の人格事業の背後に非常に強健なる身體と柔道、角力等によれる鍛鍊により異常なる忍耐力があり、これが學問、信仰、牧會、傳道、事業、人格の建設に與へた影響は豫想以上に大きいものがあつたと思はれる。

ある夏の夜私は靈南坂教會の牧師館の階上で小崎先生と二人で蚊帳を同じうして眠つて居つた處が、夜半にエーイツと云ふ大聲と共に突如起き上つた先生は私の脚をムンズと掴んだ。私もビツクリして起き上ると、暫くして先生は「ア、栗原君か、實は今泥棒を捉へた夢を見た」と仰せられた。

餘りこの懸聲が大きかつたので階下の人々も皆目を覺ましてしまつた。先生は角力の四十八手を知つて居られ親睦會が雨で外出が出来ない時など青年達に角力の手を教えられた事も屢々であつた。

鍛鍊された頑健なる肉體、現在の私達はその點に於ても初代教會の大先輩殊に小崎先生に學ぶ處があらねばならぬと思ふ。